

## 「高齢者とペットとの関係」の支援に向けた 「長期的視点」に関する予備的考察

加藤 謙介

Preliminary considerations of relationship  
between older persons and companion animals from a long-term perspective

Kensuke KATO

### Abstract

The present study examined relationship between older persons and companion animals from a long-term perspective. In concrete, (1) Previous studies concerned with relationship between companion animals and elderly people from 1980 to 2013 were examined based on International Federation of Afing(IFA)'s review, (2) Newspaper articles about this issue were collected from 1985 to 2014, and examined long-term tendency quantitatively. Based on this discussion, importance of long-term perspective to support the relationship between older persons and companion animals were considered preliminarily.

**Key words** : relationship between older persons and companion animals, support, long-term perspective

キーワード : 高齢者とペットとの関係, 支援, 長期的視点

### 1. はじめに

少子高齢化の急速な進展と、それに伴う高齢者人口の増加により、特に支援が必要な高齢者に対するサポートが喫緊の社会的課題となっている。「平成27年版高齢社会白書」(内閣府2015)によれば、65歳以上の高齢者人口は、2014年10月1日現在で3,300万人(男性1,423万人・女性1,877万人)となり、高齢化率も26.0%と過去最高となっている。また、同白書によれば、介護保険制度における要介護者又は要支援者と認定された人(「要介護者等」)のうち、65歳以上の数は、2012年度末で545.7万人となり、2001年度末と比較して258.0万人増加している。

こうした状況を踏まえて、高齢者に対するサポートのあり方や制度自体も変化しつつある。ごく最近の動きとして、厚生労働省は、2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生

の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の構築を推進している。地域包括ケアシステムの枠組みについて検討してきた「地域包括ケア研究会」では、システムの支援の担い手について、費用負担者による区分から、「自助」「互助」「共助」「公助」の4者を設定している(地域包括ケア研究会2009;三菱UFJリサーチ&コンサルティング2013)。このうち、「自助」については、「自ら働いて、又は自らの年金収入等により、自らの生活を支え、自らの健康は自ら維持すること。」「互助」は、「インフォーマルな相互扶助。例えば、近隣の助け合いやボランティア等。」「共助」は、「社会保険のような制度化された相互扶助。」、そして「公助」は、「自助・互助・共助では対応できない困窮等の状況に対し、所得や生活水準・家庭状況等の受給要件を定めた上で必要な生活保障を行う社会福祉等。」と、それぞれ定義されて

いる。同研究会では、少子高齢化の急速な進展に伴い、「共助」「公助」のみで高齢社会を支えるのは困難であり、「自助」「互助」の重要性を改めて認識することが必要であると論じている。

このように、高齢者に対するサポートは、時代とともに、また社会状況や制度の変遷に即して、その担い手だけでなく、「問題の設定」そのものが変化しつつある。高齢者に対する「支援のあり方」を検討するにあたって、その動向を長期的な視点から検討する必要があることは論を俟たないだろう。

さて、高齢者に対するサポートの担い手の1つとして、近年、注目を集めているのが、いわゆる「ペット(家庭動物)」に代表される動物との関わりである。動物が高齢者の心身にもたらす「良い影響」については、国内外で様々な研究が行われている。また、それをケア手法の1つとして臨床現場に導入しているのが、いわゆる「アニマル・セラピー」であり、国内でも、1980年代後半から実践が進められている(例えば、(社)日本動物病院福祉協会1996)。

サポートの担い手としての動物と、高齢者との関わりの特徴についても、高齢者に対する支援全般と同様、時代とともに、その「問題」が変化していると考えられる。「高齢者とペットとの関係」についてより検討を深めるためにも、「長期的視点」から捉える方途を考える必要があると言えるだろう。

以上を踏まえ、本稿では、「高齢者とペットの関係」の検討に際する「長期的視点」について示唆を得ることを目的とした。具体的には、(1)「高齢者とペットとの関係」に関する過去約30年の研究をまとめたレビュー論文をもとに、論点の整理を行った。(2)過去30年間の新聞記事を題材に、新聞記事上に現われた「高齢者とペットとの関係」をめぐる「問題」の推移を検討した。その上で、「高齢者とペットの関係」を支援するための「長期的視点」について、予備的な考察を試みた。

## 2. 「高齢者とペットとの関係」に関する研究の動向: IFAのレビューを中心に

臨床場面にせよ、家庭場面にせよ、動物とのかかわりが、高齢者の心身の健康にとって良い影響をもたらすことについては、既に様々な視点からの研究・報告がなされており、それらの研究を概観したレビュー論文も少なくない。最も新しいレビューの1つとしては、International Federation of Aging (以下、IFA) による報告が挙げられる。IFAは、1980年から2013年までの関

連研究を整理し、その研究の動向と知見、課題について報告を行っている(International Federation of Aging 2014)。IFAによるレビューは、その内容から、大きく3点のパートに分けることができる。本稿では、この報告に即して、筆者の所見を交えつつ、「高齢者とペットとの関係」に関する論点を整理していこう。

**2-1. 用語の定義** まず、レビューの冒頭で、「高齢者とペットとの関わり」の分野における重要な用語について、8つの定義が紹介されている。具体的には、「動物の福祉(Animal Welfare)」、「コンパニオン・アニマル(Companion Animals)」、「健康(Human Health / Animal Health)」、「高齢者(Older Persons)」、「動物介在活動・動物介在療法(Animal-assisted Activities (AAA) and Animal-assisted Therapy (AAT))」、「動物介在介入(Animal-assisted Intervention (AAI))」、「人と動物の絆(Human-animal Bond)」、そして「1つの健康(One Health)」である。

筆者のように、「人と動物の関係学」の研究に携わる者にとっては既知の用語ばかりではあるが、例えば、高齢者ケアの専門家にとっては、なじみのないことばも少なくないだろう。「高齢者とペットとの関係」に関しては、対人援助と動物関係の2分野以上の専門職の連携が前提となっている領域であると考えられる。こうした定義の列挙は、多職種連携の研究・実践を進めるために、まずは概念の共有が必要になることが示されているとも言えるだろう。

**2-2. ペットが高齢者の心身の健康にもたらす影響** 続いて、「ペットと高齢者の関係」に関する調査研究について、「ポジティブな指標」と「あいまい、あるいはネガティブな指標」の2つから整理が行われている。

「ポジティブな指標」を示した報告について、「身体的健康」「精神的・心理的健康」「精神的健康とウェルビーイング」「社会的健康」「経済的健康」の5つのカテゴリーでまとめられている。第1に、「身体的健康」への影響について、ペットの飼育が、「心疾患集中治療室の外来患者の生存率が高い」、「コレステロール値・血圧レベルが低い」、「ストレスに関わる血圧増加が少ない」、「1年間でのADL悪化の進行が遅い」、「通院回数・薬の支出が少ない」等をもたらすことが挙げられている。また、犬の飼い主は、望ましい身体活動レベルに達しやすいこと、歩くことや体を動かすことへの肯定的な信念を持ちやすいことが指摘されている。さらに、アルツハイマー病棟への水槽の導入が、高齢者の栄養摂取や体重増加に良い影響をもたらすとともに、サプリメントの摂取が減少して、医療費節減にも効果的であるが示唆されている。

第2に、「精神的・心理的健康」に対して、アニマルセラピー（AAT）が様々な効果をもたらすことが整理されている。例えば、認知症の行動的・心理的兆候（BPSD）における「興奮・攻撃性の顕著な減少」、「注意力・接触・発話・笑顔等の向社会的行動の改善」、「抑うつ・不安・行動の混乱の改善」等が挙げられている。

第3に、「情緒的健康とウェルビーイング」への影響に関して、「自尊感情」、「人生満足度」を向上させるとともに、「孤独感」、「悲哀」、「不安」等を減少させることが挙げられている。あわせて、近親者との死別の過程に向き合う際、ペットが高齢者にとって重要な役割を果たすことが指摘されている。

第4に、「社会的健康」への影響について、ペット飼育が、高齢者の公共空間の使用や社会的相互作用、市民的社会参画（civic engagement）を促し、地域への帰属意識を高める役割を果たすことが論じられている。

そして第5に、「経済的健康」に関して、ペット飼育者の通院回数が少ないことで、医療費負担が減少することが示されている。

一方、「あいまい、あるいはネガティブな指標」に関しては、「身体的健康」「精神的・心理的健康」「情緒的健康とウェルビーイング」の3点から整理されている。「身体的健康」に関して、ペット飼育者の方が心疾患後の死亡や再入院の傾向が高い等、リスク要因にも改善要因にもなり得るとの指摘がなされている。また、ペット飼育者は、自身の健康を軽視しがちであり、ペットとの別れや、その後ペットが安楽死させられることを危惧して、入院・入所を拒むことがあるとの指摘もなされている。また、猫の飼い主の方が「肥満」、「高血圧」であり、精神科外来に通院する傾向があるとの結果も示されている。これらに加えて、アニマル・セラピーが「精神的・心理的健康」に顕著な効果をもたらす結果が得られないことや、「情緒的健康とウェルビーイング」に関して、犬と猫とで飼い主への効果に差が見られること等が指摘されている。

IFAのレビューが示すように、ペットが高齢者の心身の健康に対してもたらす影響について、既に様々な視点から検討が重ねられている。研究としての精度はさておき、「ペットが高齢者の心身の健康に様々な影響をもたらすこと」については、これまでの知見として明示することができるだろう。また、ポジティブなものだけでなく、ネガティブな影響についても、既に様々な指摘がなされていることは重要である。特に、ペット飼育者が入院・入所を拒む事例については、ペットとの関係が高齢者自身にとって良いものであるがゆえに、医療・福

祉サービスからの支援が滞ってしまうことを示しており、ペット飼育を含めた高齢者への支援のあり方の難しさが表れていると言えるだろう。

2-3. 研究上の課題・改善の提案 上記の文献レビューを踏まえ、これらの知見を得るにあたっての「研究」における不備が、数多く指摘されている。例えば、アニマル・セラピー時に同席している人間による影響、参加動物の特性（性別・年齢・種別など）、対象者の服薬状況、心理検査の正確な手続き等について、記述や手続きの不備があるとされている。また、アニマル・セラピーの方法として、施設飼育型と施設訪問型では、利用者-職員-動物間の相互作用に相違が見られるはずだが、その点についての比較研究も行われていない。加えて、獣医療関係者の関与、人獣共通感染症への統一的な対応、医療サービスの利用頻度以外の経済的影響、身体的健康と動物の気性との関係、そして、高齢者とペットとの関係の文化的差異について、ほとんど研究が行われていないとの指摘がなされている。レビューでは、こうした研究上の課題や不備を改善することで、より良い知見が得られると論じられている。

これらに加えて、レビュー後半には、「高齢者とペットとの関係」を支援する団体・組織が紹介されている。例えば、高齢者向け住宅でのペット飼育支援、高齢者・障がい者のペット飼育支援のためのボランティアによる自宅訪問活動、愛護団体と連携した新しい飼い主捜し支援等に取り組む実践について、アメリカ・オーストラリアでの事例がまとめられている。

「人と動物の関係」の効果検証に関して、逸話報告的なものが多く、研究としての精度に欠けているとの指摘は、以前から、他の多くの論者も述べているところである。筆者自身も、「人と動物の関係」研究に携わるものとして、理論的・方法論的陶冶の不足を痛感している。もとより、当事者のための研究・実践であるため、エビデンスを得ることが目的となつては本末転倒であることは言うまでもない。しかし、効果に関するエビデンスがあることで、高齢者にとって、より良い動物との関わりを提供・維持することが可能になる場面もある。これについては、第4章で論じる。

### 3. 新聞紙上に見られる「高齢者とペットとの関係」

「高齢者とペットとの関係」に関する「長期的視点」について示唆を得るために、マスメディア報道に見られる「高齢者とペットとの関係」の社会的言説の特徴について、特に新聞記事を題材として検討を行った。

3-1. 新聞記事の収集 本稿では、検討するマスメディアとして朝日新聞を取り上げ、同社のオンラインデータベース（アサヒ・コムパーフェクト）を用い、「高齢者」と「ペット」とが関連する記事を収集した。なお、記事の収集は、2015年9月に実施した。

3-2. 関連記事の選定 1985年1月1日から2014年12月31日までの30年分を対象に、「高齢者」と「ペット」とが関連づけられた記事を網羅的に検索した。

3-3. 分析方法 選定した記事について、単純集計をもとに、以下の2点について分析を行った。第1に、「高齢者」と「ペット」という語が含まれる記事数の推移を年ごとに整理し、その推移の特徴を検討した。第2に、特に件数の推移に顕著な変化があった年の記事の一部について、記事内容の特徴を検討した。

#### 3-4. 分析結果・考察

■記事数の推移 「高齢者」と「ペット」という語が共起した記事は、期間中で471件であった。記事数の推移を年ごとに整理したものが、以下のグラフである（図1）。

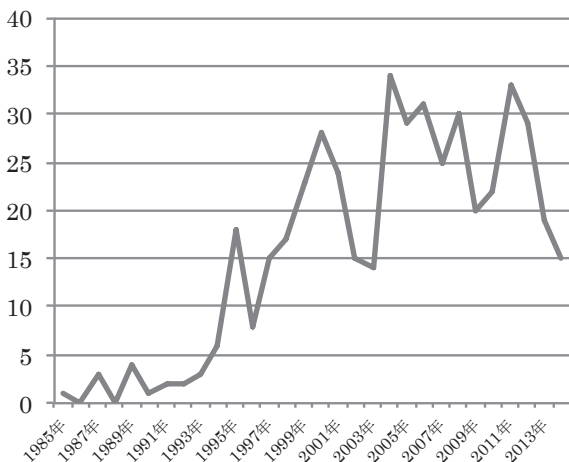


図1 キーワード「高齢者」と「ペット」が共起する記事数の推移

図1に示されているように、キーワード「高齢者」と「ペット」が共起する記事数は、1990年代前半までは、概ね年間5件程度で推移しており、記事が全く出現しない年もあった。しかし、1995年に、記事数の急増が見られた（18件）。その後、2000年（28件）、2004年（34件）、2008年（30件）、2011年（33件）に、記事数の急増が見られた。

本稿での新聞記事分析は、記事内容全てを詳細に分析したものではない。このため、期間中に得られた471件の記事には、1つの記事中に、「高齢者」と「ペット」が直接関連づけられていないものも少なくないと考えられる。しかし、1つの記事中に2つのキーワードが共起す

るということは、少なくとも、同じ文脈の中で、「高齢者」と「ペット」のそれぞれが、「問題」として位置づけられることを示していると考えられる。このように捉えると、新聞記事に見られた言説の動向には、「高齢者とペットとの関係」をめぐって、新たな「問題」が提示される動態が示されているとすることができるだろう。

■記事内容の特徴 記事数が急増した年を中心に、記事内容の一部について、その特徴の検討を行った。1995年、2004年、2011年の件数の増加については、これらの年に発生した巨大災害に関する報道量の増加が関連していると考えられる。具体的には、阪神・淡路大震災（1995年1月17日）、新潟県中越地震（2004年10月23日）、東日本大震災（2011年3月11日）である。実際に、これらの年に収集された記事は、「災害時のペット救援」をテーマに新聞記事分析を行った筆者の過去の研究（加藤2013）で検討したものと、重複が多く見られた。また、その記事内容は、「高齢者とペットとの関係」を、直接扱っていないものが多い。しかし、巨大災害時において、「高齢者への支援」と「ペットへの支援」の双方が、「問題」と見なされていることが示されていると言えるだろう。

本稿の分析では、巨大災害の発生以外に、記事数の急増に影響を与える出来事は見出せなかった。しかし、時期ごとに記事内容に変化が生じることもあり、これまでに示されていなかった「新たな問題」が提示されることもあった。

例えば、期間中で最も古い記事は、「ペットと使い捨て文化 犬・ネコ74万匹が安楽死（現代社会）」と題されたものであった（1985年12月8日付）。ここでは、安易なペット飼育に伴う問題が指摘され、犬の「ふん公害」に対して「高齢者事業団のお年寄りがパトロール」している例が紹介されていた。その10年後、阪神・淡路大震災から半年後の時期には、「ペットも、高齢者のために役立つはず」と、被災したペットを伴った老人ホームへの訪問活動が報告されていた（1995年7月23日付）。さらにその5年後、2000年3月7日には、「もしもの時の飼い主は？超高齢社会とペット事情」と題された長文（3760文字）の記事が掲載され、冒頭の一段落で、以下のような記述がなされていた。「四人に一人は六十五歳以上という『超高齢社会』は目の前だ。一人暮らし、老夫婦だけという世帯も増えている。犬や猫などのペットは、そうした彼らの心の支え。運動量が増え、健康にもプラスとの研究結果もある。しかし、『もし自分が倒れたら残されたペットは』と不安がる高齢者は多い。ペットの世話を理由に入院を拒む例もあるという。残されたペットの行き先を探った。」。その後、2008年には、各自

治体の動物愛護管理推進計画作成の中で、犬猫の殺処分数減少のための取り組みの1つとして、「高齢者のペット飼育とその支援」が、3つの自治体で指摘されていた（静岡県・2008年4月12日付／島根県・2008年4月7日付／福井県・2008年12月19日付）。

これらの記事内容には、一見すると、直接的な相互の関連はないように見受けられる。記事中に提示された「問題」相互の関連やその変化の動態について検討するには、全ての記事を対象とした、詳細な内容分析が必要になる。紙幅の都合上、本稿では十分な検討を行うことが叶わない。しかしながら、上記の記事内容から、「飼い主の高齢化に伴うペット飼育の困難」という「問題」は、「超高齢社会の進展」という社会状況の変化とともに提起されるようになったことが示されていると言える。また、「動物愛護管理推進計画」という制度上の変化は、「殺処分数の減少」という目標設定を強化し、それに伴って「高齢飼い主への支援」という「問題」への関心が高められていることも示唆されている。「高齢者とペットとの関係」は、単に、その二者関係からもたらされる健康上の利益・不利益に留まらず、社会状況や制度の変化に伴い、新たな課題や支援のあり方が求められることが、本稿での分析からも示唆されていると言えるだろう。

#### 4. 「高齢者とペットとの関係」への支援に向けた「長期的視点」

本稿での検討の結果、「高齢者とペットとの関係」をめぐる様々な論点について整理を行うことができた。IFAのレビューでは、高齢者の身体的・心理的・社会的健康に対して動物がもたらす「効果」について様々な知見が示された一方で、「研究」上の不備や課題、改善の方向性についても議論が行われていた。レビュー論文は、過去約30年分の研究結果を総覧したものであるため、知見の特徴についてはよくまとめられていると考えられる。しかし、時代の変化とともに、検討すべき「問題」自体が変化していくことについては、十分な議論がなされていないと言えるだろう。

これに対して、新聞記事分析では、「高齢者」と「ペット」が同じ記事中で言及される件数が、増減を繰り返しつつも、年々増加する傾向があることが示された。また、記事中で示された「高齢者とペットとの関係」をめぐる言説の内容には多様性と変化が見られ、その要因として、社会状況や制度の変化が影響を与える可能性があることが示唆された。

高齢者にとって、ペットをはじめとする動物との関係

が、心身に良い影響をもたらすとの知見は、既に数十年前から指摘されている。しかし、「長期的視点」から捉えれば、「高齢者とペットとの関係」は、単にその二者関係からもたらされる利益・不利益だけではなく、社会状況の変遷に伴い、「問題」自体が変化し、その関係をより良いものとするために、何らかの「支援」が必要になりうるということが、本稿での整理から示唆されたと言えるだろう。

地域包括ケアシステムにおける支援の担い手の区分に基づけば、「高齢者とペットとの関係」とその支援は、「自助」あるいは「互助」に関わるものとなると考えられる。また、その支援のあり方は、アニマル・セラピーをはじめとする臨床場面と、ペットに代表される家庭場面の2側面があると考えられる。本稿を閉じるにあたり、この支援の2側面について、長期的視点に基づく「問題」の変化を含め、「高齢者とペットとの関係」の「支援」に関する近年の動向と論点について、整理を行った。

臨床場面における「高齢者とペットとの関係」への支援に関しては、介護保険制度導入に伴う変化と、アニマル・セラピーの実践継続との関連についての「問題」の提起が指摘できる。高齢者施設等でのアニマル・セラピーは、国内でも、1980年代後半から実践が進められてきた。しかし、実践の展開と長期化に伴い、新たな課題となってきたのが、制度的な制約とコストの問題である。高齢者福祉に関する過去30年間での最も大きな変化の1つは、介護保険制度の導入であろう。介護保険制度は、高齢者個々人のニーズに即したケアの提供を目的に設定され、利用者に様々な恩恵をもたらしてきた。しかし、法制度に明記されていない支援については、制度上の支援が受けられない事態も生じている。アニマル・セラピーに代表される、臨床場面での動物活用は、そのような「法制度に明記されていない支援」の1つであると考えられる。アニマル・セラピーも、もちろん、利用者のニーズに応えるために導入されたケア実践の1つであった。しかし、介護保険制度の枠内に明確に位置づけられていないため、事業所としては、そのコストの捻出が大きな課題となることもあるという。このため、介護保険制度にアニマル・セラピーを「組み込む」ために、認知症ケアにおけるアニマル・セラピーの「効果」に関して、よりシビアな検証が求められることとなっている（横山・忠田・生長他2011）。

こうした例は、臨床場面における「高齢者とペットとの関係」の活用が、例え良い効果をもたらすものであったとしても、長期的視点からみると、新たな制度の導入に伴い、その実践の継続が困難になる可能性があること

を示している。逆に言えば、長期的視点に立てば、「高齢者とペットとの関係」を維持するための支援に関して、「継続的に実現可能とする」ことが新たな「問題」として提起され、そのための新たな支援のあり方が課題となることを見出すことができる。このように捉えると、第2章で紹介したアニマル・セラピーの「効果検証」には、単に学術的な知見に留まらず、より良い高齢者ケアの実践を継続するための「エビデンス」を提供する意義もあることを、より鮮明に示すことができるようになると言えるだろう。

一方、家庭場面における「高齢者とペットとの関係」への支援については、「高齢者のペット飼育」に対する支援の問題が挙げられる。IFAのレビューでも整理されていたように、高齢者がペットから得られる「良い影響」については、既に数多くの報告がなされている。しかし、近年の高齢者人口の急速な増加に伴って、高齢者自身の老いや病によってペットとの適正飼養が困難になることや、その結果、多頭飼育等の新たな困難事例が生じること等、新たな「問題」が顕在化するようになっている。すなわち、長期的視点からみると、家庭場面においても、「高齢者とペットとの関係」は、それ自体が支援の対象となりうることが示唆されている。しかし、そもそも「高齢者とペットとの関係」は、社会的には、「インフォーマルな問題」とされていたため、福祉専門職・動物専門職の双方から、支援の困難さが指摘されてきた(加藤2011, 2012)。

しかし、ごく最近になって、この問題への支援に関する議論が広がりはじめ、新たな取り組みが進められるようになってきている。例えば、川崎市では、動物愛護管理行政が、高齢者福祉行政や、地域包括支援センター等の社会資源と連携し、高齢者のペット飼育に起因するトラブルが生じないよう、対応を試みる取り組みを始めている(環境省2014)。また、獣医療関係者からも、動物専門職と地域包括ケアシステムとの連携のあり方についての提案がなされ始めている(細井戸2015)。こうした新たな支援や連携の登場もまた、「高齢者とペットとの関係」をめぐる長期的な変化の1つと考えられる。それゆえ、家庭場面における「高齢者とペットとの関係」についても、長期的視点から捉える必要性があることが示されていると言えるだろう。

高齢者へのより良い支援のあり方が模索される中、「高齢者とペットとの関係」は、高齢者自身の個別のニーズに応じたサポートを提供できる社会資源の1つとして、位置づけられるようになりつつある。しかし、長期的視点に立てば、臨床場面にせよ、家庭場面にせよ、その関

係をより良いものとして維持し、継続していくために、その関係そのものに対する支援が求められることが、本稿での検討から見出された。より良い支援のあり方を考えるなら、「高齢者とペットとの関係」について、今後も、10年単位の長期的視点から検討を深めていく必要があると言えるだろう。

## 引用文献一覧

- 地域包括ケア研究会(2009)「地域包括ケア研究会報告書～今後の検討のための論点整理～」  
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/05/dl/h0522-1.pdf>, 2015年9月20日)
- 細井戸大成(2015)「地域を幸せにする伴侶動物飼育支援システム:伴侶(家庭)動物との暮らしを地域活性へ」『りぶ・らぶ・あにまらず ICAC KOBE 2015 第4回 神戸全ての生き物のケアを考える国際会議2015』48-49.
- International Federation of Aging(2014) Measuring the benefits: Companion animals and the health of older persons.  
(<http://www.ifa-fiv.org/wp-content/uploads/2014/09/Companion-Animals-and-Older-Persons-Full-Report-Online.pdf>, 2015年9月20日)
- 環境省(2014)「川崎市:引取りを今後求められる可能性のある事例の早期情報収集・早期対応のための高齢者関係部局との連携」『人と動物が幸せに暮らす社会の実現プロジェクト:事例紹介:引取数の削減』  
([http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/project/practice\\_take.html#article03](http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/project/practice_take.html#article03), 2015年9月20日)
- 加藤謙介(2011)「地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題:ナラティブ・アプローチの視点から」『九州保健福祉大学研究紀要』12, 21-29.
- 加藤謙介(2012)「地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題(2):「喪失の語り」と「支援」をめぐる語り」『九州保健福祉大学研究紀要』13, 1-8.
- 加藤謙介(2013)「災害時におけるペット救援」に関する予備的考察:先行研究の概観及び新聞記事の量的分析より」『九州保健福祉大学研究紀要』14, 1-11.
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2013)「<地域包括ケア研究会>地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」  
(<http://www.murc.jp/uploads/2013/04/>

koukai130423\_01.pdf, 2015年9月20日)  
内閣府(2015)「平成27年版高齢社会白書」  
(<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/index.html>, 2015年9月20日)  
(社)日本動物病院福祉協会(編)(1996)「動物は身近なお医者さん：アニマル・セラピー」廣濟堂出版

横山章光・忠田正樹・生長豊健(他)(2011)「第89回月例会・岡山例会シンポジウム さらなるアニマルセラピーを考える：高齢者施設を中心に 総合自由討論」『ヒトと動物の関係学会誌』30, 48-58.